



ケヴィン・オヘア近影 Photo: Teri Pengilly

ケヴィン・オヘア インタビュー

2009年から英国ロイヤル・バレエの事務局長を務め、昨シーズン初めに英国ロイヤル・バレエの芸術監督に就任したオヘアに、本誌編集長エマ・コールドラーがお話を伺いました。

エマ・コールドラー（以下EK）：お仕事のうち、最もやりがいを感じるの？

ケヴィン・オヘア（以下KO）：いろいろありますが、やはり芸術に関わる部分です。事務局長の仕事は、手順を踏んでいけば結果がついてきました。たとえばツアーの準備なら、しかるべき担当者に話しておけばよかったです。でも芸術監督は、もっと一人ひとりとしっかり関わらなくてははいけません。芸術には夢も挑戦も伴い、事務的な仕事よりも重層的なのです。

EK：芸術監督には、ご自身で応募なさったのですか？それともバレエ団から誘われて？

KO：自分からです。そして、バレエ団の審査を受けました。モニカ・メイスンが退任すると聞いたときから頭の隅にはありましたが、決心したのはぎりぎりになってです。「考えてみた？」と何人かに聞かれ、その気になりました。パリに出張中にホテルの狭い部屋で、バレエ団のヴィジョンなどについて考えを巡らせたのを覚えています。面白いことに、心を決めて面接を次々と受けているうちに、「芸術監督になりたい、このまま事務局長でいても満足できない」という気持ちがかんたん強くなっていったんです。

EK：相手にノーということは難しいですか？特に、長年親しくしている人に対して。

KO：簡単ではないですね。誠意を尽くし、正しい判断を下すように心掛けていますが、誰もがキャリアを高めようと挑戦を求めている中、全員に機会を与えられないのは辛くもあります。

EK：ダンサーは、スプレット（庶民的な娘）や詩的な役といった風に、自分に合った役を選んで踊るべきだと思いますか？それとも、いろいろ試すべきでしょうか？

KO：どちらとも言えます。合わないと思われた役が踊ってみると素晴らしくて驚かされることもありますから、ダンサーを型にはめてはもったいない。ただし、一つの役を踊りこなすにはそのためのテクニックが必要で、スタイルや観客の好みも問題になってきますから、幅を広げるにも限界はあるでしょう。スプレットが得意な人が純クラシックの役を踊ってみると、案外いいこともある。でもいちばん大事なものは、本来の自分に合った役を次のレベルに引き上げることで、チャレンジは、アーティストとしてダンサーとして前進する助けになるという意味で、必要です。

EK：キャストイングの権限はどの程度あなたにあるのでしょうか？作品の権利所有者や振付家の好みに影響されますか？

KO：完全な自由はありません。私が信頼されている場合は話は簡単で、自分で決めた後で、礼儀上誰が踊るのかを知らせればいい。ただ最終決定を自分でしたがる人だと、私は希望を強く推すことはできても、決めるのは先方です。振付家に対しては、「これがロイヤル・バレエです。好きなダンサーを選んでください」となります。

EK：来シーズンのウェイン・マグレガーの新作について教えてください。ヴァージニア・ウルフにインスピレーションを得た作品とのことですが、マグレガーが物語バレエを手がけるのは珍しいですよね。

KO：いくつかのアイディアを経て最終的に彼がウルフに行き着いた時、これはすてきだと思いました。彼女の一生をなぞるのではなく、その著作や人生の諸相を描くバレエになるのではないかと考えています。

EK：アレッサンドラ・フェリの客演は誰の提案ですか？

KO：ウェイン自身です。私がまだパロンズ・コート（ロイヤル・バレエ学校）にいたとき、よく彼女のリハーサルを窓から見つめたものです。本当にすてきだった。彼女が大役を次々と初演していた頃でした。兄のマイケルと同級生だから、私より4つ年上ですね。ウェインは以前からフェリとは顔見知りでしたが、彼女の復帰公演の『シェリ』をニューヨークで観て自分の新作に出てほしいと思ったそうです。フェリから私へのメールには、「人生はまったくどう転ぶかわからないわ」とありました。ロイヤルとまた踊る日が来るとは思ってもみなかったのですが、ほんとうに素晴らしいことです。（訳：長野由紀）